

入選

テーマ：誰かのために、わたしが出来ること 「君の心のパレットに」

神奈川県立相模原中央支援学校3年 保田健太

日本は、数えきれないほどの問題を抱えている。その一つに少子高齢化がある。二〇二五年には、全人口に対して高齢者の割合が二十五パーセントを超えると推測されている。そして、医療の発展に伴い障害者も増えている。

だから、高齢者も障害者も様々な形で社会参加をしていくことが必要だ。それには、ノーマライゼーション社会に変わっていくかなければならない。これは、高齢者や障害者を施設に隔離せず、健常者と一緒に助け合いながら暮らしていく社会という考え方である。もちろん、簡単なことではないし、多くの人の理解と協力が必要だ。だがそれが、上手く噛み合い一つの歯車となった時、様々な問題が良い方向へ進み、共生社会の実現となる。

そして福祉とは、健常者・障害者・老人全ての人が幸福に楽しく暮らせることだ。また、障害者福祉Ⅱ自立Ⅱ就労でもない。少しでも幸せに暮らす為の手段として、自立や就労があるのだ。だが現実には、就職したいと願っても身の回りの自立と一般の交通機関を使い一人での通勤が試験を受ける条件と言われる。障害者職業能力開発校でさえ同じ回答だ。様々な障害があり、その度合いも一人ひとり違うのに、自立の条件は一律だ。僕は高二の時、愕然としながら「健常者になる為のリハビリではなく、自分の体を動かし易くする為のリハビリだ!!」と空に叫んだ。

それからは、医療・福祉に関するシンポジウムなど探して参加した。そこで気付いたのは、介護の現場で働く人が足りないことだ。特に、男性の介助者は圧倒的に少ない。実際に、高齢者や障害者と触れ合っ

て仕事をしている人達は、身内や知り合いに関係者や不自由な人がいる割合が高い。自分が関わることで、何かが出来た喜びと誇りを知っているからでしょうか。すごく大切なことですが、伝えるのはとても難しいです。

それならば、僕が小学生や中学生に自分の体験を伝えれば良いと思つた。僕は全身の運動麻痺という障害を抱えて生まれ「一生話すことも自分で何かすることもできない」と医者に言われた。だけど、厳しい訓練と勉強に明け暮れ、小・中学校はエレベーターのある普通校でみんなと一緒に勉強できた。先生や友達の色々助けてくれて、みんなに支えられ貴重な体験ができた。厳しい条件の中、辛いことや悔しいことは山ほどあったけれど、その中に喜びも楽しさもあり、かけがえのない九年間だった。僕はその九年間があったから、社会に出ようと考えたし、今も頑張ることが出来るのだ。そして今、僕に関わってくれた多くの友達や、医療や介護の道へ進むうとしていく。心が震えるほど嬉しいことだ。

だから、未来の君達に伝えたい。「元気な体に感謝しようね。思つたように動けることは幸せなんだよ。人に何か頼むってとても勇気がいるよね。話ができない人も悲しい嬉しいは同じだよ。事故や病気で、突然不自由な体になる可能性は誰にでもあるんだよ。どんな体でも君と同じようにやりたい気持ちがあるんだよ。手伝った時って、君も嬉しい気持ちになるよ。勇気をもらって、もつと頑張ろうって自然に力が湧いてくるよ。笑顔のたし算はね、きつと君の新しい扉の力ギになるから。その力ギは、みんなの心の中にあるんだよ」。そして、障害を抱えている君へ。「みんなと違うことを何で何でって聞かれるよね。その殆どが分らないから言ってしまう、本当の疑問なんだよ。辛い時は、もし自分が相手の立場だったらって考えてみてね。僕はそれで心が軽くなったし元気になれたよ」。

人は気になつていても分らないと避けてしまつ。理解することで関われる。関わつた経験が次の行動を呼び、それが連鎖して集団も結束する。だから今、心を真っ白にして、そこからみんなで作っていきこう！一人ひとりの澄んだ想いが優しい色を重ねていく。今までにない無限の力が、新しい時代の色を生み出していく。一人ひとりの心のパレットに!!